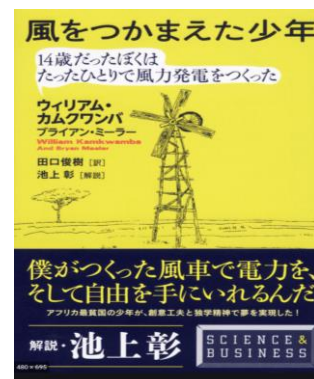


今回は、本との出会いによって人生が変わった少年の話。その少年の名は、ウィリアム・カムクワンバさん。彼の著書である『風をつかまえた少年』について、「文藝春秋 BOOKS」に池上彰さんの書評が掲載(2010.11.20)されている。

学校の図書館で出会った本がきっかけで、人生が切り開かれていく。
学ぶということが、これほどまでに人生を豊かにしてくれるとは、
私たち日本人が忘れていたことを、この本は教えてくれます。

東アフリカの最貧国マラウイを、2001年に飢饉が襲う。

農家の14歳の少年は、学費が払えないために中等学校に行けなくなる。
しかし、向学心に燃える彼は、初等学校の図書室に通って、独学で本を読み始める。その時に出会った本が、『物理学入門』と『エネルギーの利用』。
これを読むうちに、発電のしくみが理解できるようになった。
しくみを学ぶと、風車を使えば電気がつくれることに気づく。



電気代が払えない貧しい人たちでも、自力で風車を建設すれば、電気のある生活が送れる。

そのことに気づいた彼は、とうとう自力で風力発電の装置をつくってしまった。

「風をつかまえた」のだ。

これが知られたことがきっかけとなって、彼は、中等学校に再び通えるようになった。

それどころか、南アフリカの高校に進学。遂には2010年9月、アメリカの名門・ダートマス大学への進学を果たす。

彼は、人生の「風をつかまえた」



「何かを実現したいと思ったら、まずはトライしてみることだ」。
これが、少年の信念だった。

自転車のライトの灯も、水力発電も、原理は同じ。
そのことに気づいた彼の興奮ぶりをお読み下さい。

「このときぼくがどれほど興奮したか、とてもことばにはできない。単語の意味がわからなくて困ることはあったけれど、図で示された概念はわかりやすく、すんなりと把握できた。さまざまな記号—プラスとマイナス、回路の中の乾電池とスイッチ、電流の向きを示す矢印—もただそれだけで完全にすじが通っていて、ほかにはなんの説明も要らなかった」。

同書は映画化され、YouTubeでも一部視聴することができる。映像では、彼が独学で発電のしくみを理解し、自力で風力発電の装置をつくるプロセスがリアルに描かれており、彼の真摯に生きる姿勢に心が動かされる。

彼は大学卒業後、国際的な知名度を生かして母校である初等学校の改修・拡張工事のための募金活動を行い、2013年には『タイム』誌の「世界を変える三十人」に選ばれた。